最愛のキルト

コオロギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最愛のキルト

【Ｎコード】
Ｎ９０６６Ｘ

【作者名】
コオロギ

【あらすじ】
ある日から突然、最愛の熊のぬいぐるみが動き出した。
驚きを隠せない幸高（こうたか）　宙人（ひろと）だったがそこへ
ある男から一本の電話が入る。
「そのキルト（ぬいぐるみ）で願い事を一つ叶えてみませんか？」
宙人は戦いへと巻き込まれていく、最愛のキルトと共に・・・。

ＦＣ２小説にも掲載しています。

大事なもの

「ねぇ・・・ヒロト起きないの？もう学校の時間だよ？」
モーニングコールで幸高（こうたか）　宙人（ひろと）は爽やかな朝を迎える。

「・・・・・・ん？」
ただし、ものすごい勢いで寒気を覚えた。

なにせ、この部屋、この家には自分以外存在しないためである。
宙人の両親は海外出張のため長期で外出している。
ましてや朝にわざわざ起こしに来るチャーミングな幼馴染もいない。
ということは誰か？ということで寒気を感じまくっている次第だ。

「聞いてるのかいヒロト！！おきろーっ！！」

俺は声の主に背を向けないように上体を起こす。
「誰だぁ！怖くなんかないぞ！出てこい！」
恐らく幽霊か何かの類か？それとも幻覚？
どっちだろうとその方向に大声で叫べばなんとかなると思っている。

――――――――――誰もいない。

おかしい、たしかに聞こえていた方に向いたはずだ。
くまなく探してみるが・・・人影はない。
向いた方向にあるのは勉強机とぬいぐるみのウィリーである。

実は小さい頃から可愛いものに目がない幸高　宙人は高校生になっても可愛いもの離れできずに延々と愛でている。

その縫いぐるみのウィリーは8才のころ母に買ってもらった一番の宝物だ。
背丈は６Ｃｍ強のミニサイズ、小さくて可愛い白熊。
そのどこでも手軽に連れていけるサイズにも惹かれた。

「やっと、起きたねヒロト！支度しちゃいなよ！」

その縫いぐるみがしゃべっていた・・・・。

「えっと・・・ウィリーさんですか？」
と冗談混じりながらも白熊の縫いぐるみに質問を投げかけてみる。

「はい、ウィリーです」
しゃべるウィリーもまた可愛い。
違う違う、そうじゃない。状況を確認するんだ・・・・・。
なぜ、縫いぐるみが喋っている？
現在であればそう言ったグッズもあるが、ウィリーは7年前から可愛がっているフツーの縫いぐるみだ
それとも何かが取り憑いた？にしてもウィリーですか？という問いかけに「はい」と答えるだろうか？
わからない・・・・・。

「ヒロト、時間がないんだけど・・・・大丈夫？」

冷静になって時計を見る。

「あぁーっ！間に合わねぇ！！」
死ぬほど急いで支度を始める。その傍らでウィリーの声が聞こえる

がとりあえず幻聴と判断し先を急ぐ。

かろうじて遅刻せずに学校へ到着した。しかしあの朝の出来事はなんだったのであろうか・・・。

「まあ、疲れてるって事で・・・」

そこへ幼馴染の當地（とうち）　由樹（ゆき）　が話しかけてきた。

「宙人くん、おはよう・・・・今日遅かったね」

彼女は非常に内気だ。今の今まで仲良くやれたのも俺の可愛い物好きが幸いしてのことである。

見た目は地味だが可愛い方なのでは？と常日頃思っている。

「おはよう由樹、それがさぁ朝変な夢を見たんだよ！」

朝の縫いぐるみが喋った事を話そうとした時、教師が教室に入ってきた。

「おら～席に付け～！ホームルーム始めるぞ！」

「宙人くん、ごめんね・・・後で聞くから・・」

由樹はそそくさと自分の席へ戻った。

そんな申し訳なさそうに言わなくてもいいのに・・と思いながら黒板に目をやる。

教師がテストが近いからどうのこうの言っている。

俺はそこまで成績は悪い方ではないので静かに聞き入っていた。

――――――――「ヒロトっ！ヒーロートっ！」

なんか俺の鞄から聞き覚えのある声がする。

恐る恐る鞄に目をやってみると・・・・・・そこにいた、「ウィリー」が。

机に掛かっている俺の鞄の口から両手を出してこっちを見ている。

ここまで来ると普通なら恐い。B級のホラー映画になりそうなぐらい恐い。
しかし幸高　宙人には可愛く見えてしょうがない。この光景を写真で取りたいくらいだ。
いやいや、違う違う。ここは学校だ、取り敢えず騒ぎになるとヤバイ。

いそいでウィリーを押し込んで鞄を閉めた。
しかし、逆に鞄の中で騒いでいる。まずい、周りの生徒が気づかないか？

「ねぇ、誰かケータイなってない？」

「マジで！？先生に見つかったらやべーぞ！」

予想通りだ、このままではいろんな意味でピンチだ。
と・・・ここで教室内でのピンチを切り抜ける最強の方法を思いついた。

「先生！具合が悪いので保健室行ってきます！！」
ワンパターンだ。でもこれぐらいしか思いつかない。

「幸高、珍しいなお前が体調不良とは・・・まあお前は嘘をつかんか。誰か付けようか？」
さすが毎日真面目に授業を受けてただけあるぜ、俺！
「先生、とりあえず一人で行けます」
そう言い残し保健室へ向かう振りをして速やかに空き教室へ入る。

宙人は空き教室に入るなり鞄を開けた。その瞬間、鞄から何かが飛び出す。

「ぷはーっ！ひどいじゃないか！閉じ込めるなんて！」
どこからどう見てもウィリーが喋っている、もう現実逃避は不可能だ。
ここはもう腰を据えて話し合うしかない。

「なあ、なんでお前さん、喋ったり動いたりできるんだ？」
宙人は当然の質問をしてみる。

「なんでだろ・・？わかんないや。今朝からなんだ、言葉を話せたり動けたりするの」
彼の言い方だと今まで意思があったかのように聞こえる。

「もしかして・・・今まで意思は持ってたのか？」

「うん、あれだけ大事にされればありがとうを伝えたいって思うようになるよ！」

バカだ俺は。昔から思っていたはずなのに。ウィリーが動いたら・・・・。喋ったら・・・・。
すごく嬉しいな、なんてずっと思っていたのに。
そしてウィリーはありがとうを伝えたくて意思を持っていたのに。
動いたことに驚いて現実逃避してたなんて・・・・最低だ。

「ごめんなぁ・・・気づいてやれなくて・・・お前がしゃべったっていうのに返事もろくにしなかったよな・・・。」

「驚くのは当然だよ、でもなんとかありがとうだけは伝えたかったからさ！」

「今までそばに置いといてくれてありがとう！」
とても嬉しそうに言ってくれた。
返す言葉がない・・・・・・。
だから俺はそんなウィリーの数センチ程しかない頭を撫でてやった。
目に涙を浮かばせながら。

――――――――いきなり甲高い音が教室内を響かせる。
携帯の着信音だ。何故かタイミングを見計らったかのように・・・・・。
見たことがない番号だ。こういったものには出ることは無いのだが・・・違和感を感じ出ることにした。

「もしもし？」
恐る恐る相手を伺う。

「こちらは幸高　宙人様のお電話でしょうか？」
丁寧な口調だが、何か引っ掛かる言い回しだ。

「あんた誰だ？」

「私はそうですね・・・ニューとでも名乗っておきましょう。幸高様、あなたは選ばれました」
そのニューと名乗る男は楽しそうに語る。

「キルト（最愛の縫いぐるみ）たちを戦わせる人々『マスター』にね」

大事なもの（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

つづけて連載していきますので、アドバイス等あったら気軽にお願いします。

かわいい戦士達

ある男からの一本の電話。内容はぬいぐるみを戦わせないかという馬鹿げた質問だった。

「ふざけんな、絶対そんな事させねーよ」

少々イラつき始めていた。唐突に変な質問をしてきたかと思えば戦うとはどういうことだ？

「では、言い方を変えましょう。貴方の他にこの日本に『マスター』が何百人もいるとしたら？」

「だったら、どうなるって言うんだ」

「・・・では簡単なルール説明といきましょう」

電話の奥でほくそ笑んでいるのがわかる。明らかにペースをもってかれていた。

「各地に存在するマスターとそのキルトを倒すごとにキルポイントというのが入ります。そのポイントが１００ポイント貯まれば願いを一つ叶えてさしあげます」

「つまり戦わなくてもマスターとしての知識のない貴方は格好の的というわけですね」

なるほど・・・・逃げ道はどっちにしろ無いということか。それこそふざけてやがる。

「自身を守るには力をつけろと？」

「そのとおり。それに貴方のキルト、結構変りものみたいですね。ここはサポーターをつけましょう」
ニューと言う男は淡々と話を進める。

「サポーター？」

「ええ、近いうちにこちらの組織の者を向かわせるので、それまでに負けたりしないでくださいね？」

話がどんどん進んでいる。第一、どうやって戦うんだ？
俺にとってはぬいぐるみは可愛いイメージしかない。
「イマイチ、イメージがわかない。ぬいぐるみたちに戦う力があるのか？」

「そこらへんは、向かわせたものに詳しく聞いてください。私も忙しいもので・・・」

「おい！俺はやるなんていってないぞ！」

しかし電話の向こうはとうに無音だった。

そういえば負けた時の話も一切聞いていない。
説明が少なすぎる割に危険性を煽られただけのような気がする。
結果、幸高　宙人は若干怯え始めていた。

「ねぇ、ヒロト・・・だいじょーぶ？そんな嫌な電話だったの？？」
ウィリーは机に乗っかって俺を見上げながら言う。

「いや・・・大丈夫だ。なんかお前を戦わせてみないかっていう意味不明な電話だった」
実際、俺にとってはかなり意味不明な電話だった。

「ふーん、変な電話だったね」
ミニ白熊のウィリーも気難しそうな顔をしている。
ただ、それも可愛い。

「まっ！いたずら電話だろうから、気にしないでいこうぜ！」
とりあえずウィリーの前なので強がってみせる。

「うん、そだねヒロト！」

「もう、教室に戻ろう。ウィリー鞄のなかで大人しくしててくれよ？」

「しょうがないな～、じゃあ寝てる」

そんなこんなでウィリーに鞄のちょうどいいスペースで寝ててもらい、教室へと戻った。

しかし、その後の授業は全くと言っていいほど耳に入らなかった。
『マスター』やら『キルト』やら更にはポイント制だなんて言われてすぐに納得出来る奴も居ないはずだ。それに戦わせるだなんて、縫いぐるみの趣旨とは真逆すぎる。本来仲良く愛でるものだろう。

いろいろ考えているうちに、もう放課後だった。

「宙人くん、帰らないの？」
内気な幼馴染の當地　由樹が話しかけてくる。

「あ・・そうだな、帰るわ。由樹は？部活？」

「うん、茶道部だから・・・」
由樹にはとっても似合っている。嫌味ではない、本気でだ。

「そっか、じゃあ俺は帰るな」
万年帰宅部は早々に帰宅する。なにより本当に『マスター』とやらが存在するなら、外出は控えたほうが良いのだろう。さしずめ今の俺はニューという男曰くカモ候補ナンバー1なのだから。

「あ、宙人くん！あの・・・・」
由樹が何か言いかける。しかし、なかなか先を話さない。

そして沈黙・・・・。

「どした？なんか可愛いものでも見つけたのか？」
困ったときは可愛い話題だ。

「ごめんね、何でもないの。気を付けて帰ってね」
内気な女の子に心配されるとは・・・顔に出ていたのだろうか？

そっか、と告げて手を振り教室を後にした。

学校から自宅までは結構距離がある。
気づいたら辺りは夕焼けで暁色に染まっていた。
俺の鞄からはミニ白熊がひょっこりと顔を出している。

「ヒロト！帰ったら何か食べてみたい！」
この子は随分と突飛な発言をする・・・・。

「おまえさん、食べれんの？」

「・・・・雰囲気だけでも」
そんな不思議な会話をしている途中で違和感を覚える。

人通りが全くと言っていいほどないのだ。
何かによって仕組まれたかのような・・・・。
そして宙人も会話に夢中で自然と人通りの少ない場所を通ってしまっていた。
なにせ、いつもの帰路はこういった場所を選んでいるからだ。

「やべぇ、自分で自分を追い込んでどうする・・・」

そして違和感から不安へと変わる。
前方から人影が現れ、人影は間違いなく俺に向かって歩いてきている。

「まさか・・・・な・・・・」
だが、不安は見事に的中する。

――――――――「おまえ、『マスター』だな？」
そう言ってきた男は中年でぬいぐるみなど到底持っていると思えない風貌だ。
しかし、その傍らに全長１０センチ程のテディベアが突っ立っている。

本当に存在したのだ『マスター』が。
そう認識した瞬間、一気に恐怖が全身を駆け巡る。
この状況は相当危険だ。なんとか戦いは避けねばならない。

「なあ、今回は見逃してくれないか？なったばかりで訳わかんねーんだ」
これならば情のある人間なら見逃してもらえるはずだ。

「逆に好都合だ、キルポイントを稼ぐのにな」
完全に墓穴を掘ってしまったようだ。ましてや相手に俺の弱さを知らしめるなんて愚かすぎる。

「さあ、出せ！お前の『キルト』を！」
もう逃げようがない、出してもウィリーが傷つく。ならば俺にとって出来ることは一つだ。

「嫌だね・・・こいつは大切な親友だ！俺が守る！」

「成程、ではマスターに傷ついてもらう。つまり貴様が死ぬことになるという事だぞ？」

俺は負けのルールを知らないがマスターを殺されても負けということになるらしい。
これは相当ヤバいゲームだ。こんなものに関わってしまうとは・・・・。

「ちっ！言ったことは曲げない！だが死ぬつもりもない！」
精一杯の強がりだ。だがまだ『キルト』の力をまだ見ていない俺はそこに突っ立っているテディベアは怖く感じるどころか可愛く見えている。
しかし次の瞬間、テディベアは突きのような構えを取り、その場から俺に向けて物凄い速度で拳を放つ。

――――――――――その数秒後、『何か』が全身に満遍なく当たり、俺は後ろの電柱に叩きつけられる。

「うぐぁっ！」

恐らく真空波だろうか？体全身にズキズキとした痛みが走る。
「初心者といったな？これでわかったろうに、さっさとキルトをだして負けを認めろ。俺も殺生は好まん」
この中年の男性も良心で言っているに違いない。だがそんなのはゴメンだ。
「い・・・嫌だねっ！死んでも守る」

「強情な奴め、どうなっても知らんぞ？」
またあんなのを食らうのは嫌だが、ウィリーが傷つくのも嫌だ。
そんな俺を見かねてかウィリーが出てくる。
「ヒロト！！ボクをだして！！こんなことしたらヒロトが死んじゃうよ！」
今にも泣きそうな顔をしているミニ白熊が一匹。
実に可愛いものだ。故に絶対に守り抜く。
「お前は引っ込んでろ！どう見ても俺の方が丈夫だ！」
そんなことをいって鞄に押し込む。
理由にはムリがあるがこう言いはるしかない。
「嫌だ！ヒロト苦しそう！！そんなの見たくない！」
またひょっこり顔をだす、危険だと言ってるのに。

しかしその刹那、このミニ白熊を目掛けて鋭い真空波が放てれたのを察知した。
すんでのところで鞄を抱え背を向ける。

そして鋭い真空波は俺の背中へと突き刺さる。

「・・・・っ！！」

出血し、あまりの痛みに言葉が詰まる。体勢も膝から崩れ落ちる。

『キルト』の力を目の当たりにし絶望的にもなっていた。

「本当に強情だな？折角キルトを狙ってやったのに・・・痛いだろう？無理するな」

やはりウィリーを狙っていた、冷酷な男ではない事はわかる・・・

わかるのだが・・・・。

「うるせぇ！誰も頼んでねぇ！！余計なことすんな！」

俺なりの強がりだが、体はもう限界が近い。

ふと手元の鞄に違和感を感じる。

「・・・・ウィリー！？」

――――――――――　振り返るとその６センチ程しかない体をめいっぱい広げ俺を守っていた。

「やめてよぉ！もうヒロトは限界なんだ！ボクならここにいるだろ！！」

すぐにその元へ行こうとする、だが全身の痛み、出血で体が言うことを聞いてくれない。

なんでだよ・・・！せっかく話せたのに！楽しく過ごせるはずだったのに！
こんなんで終わりなのか・・・・！？なんで自分の大切な縫いぐるみ一つ守れねぇんだ！！
相手のキルトを見る。ウィリーを目掛けて突きの構えを取っていた。
「ちくしょうっ！逃げろ！ウィリーっ！！」
だがウィリーは動く気配がない。
そしてゆっくりと突きがウィリーへと放たれる。
さながらスローモーション映像のように。
銃弾のような轟音と共に周りに土煙が上がりウィリーに命中。
――――――――命中したかのように見えた。
土煙が晴れるとそこにはもう一体の『キルト』がウィリーを庇うようにが存在した。
一見、ウィリーと同じくらいのペンギン（？）のぬいぐるみ。
だがどこかぎこちないペンギンを思わせる。
「たす・・かった・・？」

泣きそうなくらい安心している自分がいた。
そしてそれと同時にもう一人の人影に気づく。
「情けないマスターですね、貴方も・・・・」
その人影は近づきながら語る。
「まあ、何も教わってないのでは仕方ありませんね」
夕日で照らされ人影の正体が判明する。そして驚く。
長身でスタイル抜群、黒いロングストレートヘアの美女だ。
そして流暢に語り続ける。
「マスター黒土（くろつち）　功夫（いさお）、貴方も見境なく初心者を襲うとは少し見損ないましたよ？」

「俺には時間がない、手段を選んでいる暇などないのでな」

「なるほど、まだ戦うつもりですか？キルト構成委員会直属の私が現れても？」
確かに言うだけの程はあるようだ。彼女が現れた途端、男の表情が引きつっていた。

「言ったはずだ、時間がないと」
黒土という男はそう言いながらも、汗をかいている。

「幸高（こうたか）　宙人（ひろと）、『マスター』としての戦い方を見せて差し上げまし

ょう。『キルト』の扱いも見て勉強してくださいね？」
そして今、気づいた。彼女が組織から送られた俺のサポーターという
うことに・・・。

戦いの代償

黒髪のロングストレートヘアの美女は徐ろに手をかざす。
「ウィル、エネルギーを防御から攻撃へ転換」

「はい、マスター」
流暢に喋るぎこちないペンギンのキルト、それはどこか電子音声にも似た響きだった。

「では、倒す前に改めて名乗りましょう。私の名は機嶋（きじま）　律花（りつか）キルト構成委員所属のマスターです。キルトネームはウィル、特性は『ビジョン・ウェポン』です」

「自分から特性を明かすとは、相当の自信があるようだな？」

「えぇ、よもや貴方に負けるとは到底思えません」
機嶋は冷静に言い放つ。

「おい、アンタ・・・特性ってなんだ？」
また新しい単語だ、聞き逃すと後々響く。

「特性はそのキルトの戦闘時のスタイルのようなものです」

「スタイルって・・・そんな名前まで付くのか？ビジ・・・・なん

だっけか？」

「ビジョン・ウェポンです。主に武器を創造し使うことが出来ます」

「そいつはスゲーな。ウィリーもなにかできないのか？」

ミニ白熊に唐突に質問してみる。

「ごめん・・・全然わかんない」

てへっと言いながら頭に手をかけている。これなら特性が無くても許せる。

「特性はキルトが目覚めてから一定時間経たなければわかりません」

「一定時間て・・・もう目覚めてから半日は経つけど・・・・」

「その期間はまちまちです、最高で3日かかったキルトもいたようですから」

「そんな期間、守りきれるかよ！」

数時間でこの有様だ、明日には他のマスターに殺されるだろう。

ここで黒土（くろつち）が動き出す。

「さて、会話はもう仕舞いだ！そろそろどっちも狩らせてもらうぞ？」

そう言うと黒土（くろつち）は自身のキルト、テディベアを走らせる。

テディベアはウィルに襲いかかる。

「ウィル、シールドを生成」

「はい、マスター」
その瞬間ペンギンの手からビーム状のシールドが展開される。
バチリと音をたてて相手の攻撃を防ぐ。
「俺のキルト、モモの特性は真空斬。拳を真空波に変えたり真空の刃も扱える！」
確かにシールドが受けているのは透明な真空の剣だ。
そんなことより、さり気なく言った縫いぐるみの名前がモモとは・・・・・。
随分と可愛い名前をつけたものだ。
「成程、なかなかの威力ですね」
守りの体制のはずの機嶋は随分と余裕のようだ。汗一つかかない。

「あなたのマスターになるまでの生い立ちは知ってますよ」
ここで急に機嶋は話し始めた。
「あん？そりゃ構成委員会だったら知ってるだろうよ・・・同情したか？」
「いえ、同情など逆に対等に戦っている相手に失礼ですので」
同情？なにがあるというんだ？
第一、願い事の私利私欲のために戦っていると思っていた。
「あなたの娘、病気で1年前になくなっていますね」
同情どころか冷酷な表情で話し続ける。
「そして娘が大事にしていた縫いぐるみ、モモが貴方の想いと重な

りキルトとして覚醒した」
さすがの俺もこれには驚く。
娘のものだったとは・・・名前も納得がいく。
「ああ、そして今は妻が病気を抱えて今の精神状態ではもたないと医者に言われてな」
「１００ポイント溜めて娘を蘇らせる。そして妻にも合わせる、きっと元気になるはずだ」
黒土は本気で言っているのだろう。
「蘇らせる？おい機嶋さん、可能なのか？」
黒土の生い立ちにも驚きだが、出来るのか？そんな神みたいな事・・・。
「呼び名は律花でいいです。蘇生は可能でしょう。遺物があれば」
いきなり名前とは・・・・すこし抵抗があるんだが・・・・
「でも・・そんな事を聞いちまうと倒すのに抵抗があるな」
どうみても黒土は命を賭してまで戦う覚悟だ。
そんな相手に勝てるのか？というかむしろ同情までしてしまう。
ただ律花は冷酷な・・・いやそれ以上の冷徹な表情をしていた。
「そんなことを考えているようでは、いつか貴方のキルトは死にますよ？」
そうだった・・・・俺は負けたあとをまだ知らない。

どうしたら負けなのか？どのような状態になるのか？

「教えてくれないか？負けたらどうなるか・・・・」

律花のキルトが攻防する中、彼女は話し続ける。

「まず敗北理由その1、マスターの死。これはあまり得策ではないでしょう。マスターが死亡後、しばらくの間キルトが暴走します」

「しかし時間が経ち、マスターとの関係性が失われ自我が消滅し沈黙します」

「そして敗北理由その2、キルトが致命傷を受け自我が消滅したときです」

「この戦いの参加権も失われ、マスターはしばらく昏睡状態になり、マスターになってからの記憶を失います。キルトのエネルギーはマスターと共有して得ていますので・・・・」

・・・・と戦いながら律花は淡々と語っている。恐らく修羅場を乗り越えてきた証だろう。

「そんな・・・どっちも悲しすぎるじゃないか！」

だってそうだろ？キルトはマスターを失って悲しみ消滅。マスターはキルトを失って悲しみ、倒れ、希望をなくす。

こんな戦い、間違ってる。

「坊主！甘いな・・・それがこの戦いの代償だ！リスクがなければチャンスは得られんのだ！」

そういう黒土はどこか悲しい目をしている。

「いいですか？宙人、あなたは勝たなければならない。そのキルトを守るために」
律花はそう言うと、黒土のテディベアに向ける目の色が変わる。

――――――――あれは間違いなく殺意だ。

「おい！律花？まさか・・・・・・・・」
言いかけた瞬間だった。

「ウィル、ウェポン生成、『ミサイル』３０発」

「はい、マスター」
そういうとウィルの周りに沢山のミサイルがデジタル映像で生成されるかのように出現。

「おいおい・・・アリかよ。さすが・・・・構成委員会の犬だな」
そういう黒土は汗をかいている。どういう状況か本人も理解しているようだ。

ウィルが両手を前にかざすと一斉にミサイルたちが黒土のモモへと射出される。
モモは何発か真空斬で迎撃する、しかし数が多過ぎる。
１発、２発、３発と次々に被弾。それを期に一気に残りのミサイルが降り注ぐ。
あっという間にモモが煙に包まれて姿が確認できなくなった。

黒土も俺もウィリーも言葉を失っていた。

時が経ち、煙が風で流れていきモモの姿が露になる。

――――――――その姿はまさに『敗北』そのものだった。

かろうじて頭部、本体は残っているが手足はほぼ吹き飛んでいる状態だ。

防御する瞬間真空で手足を使い体を庇ったせいだろう。

「・・・・・っ！」

黒土は言葉に詰まる。

「こんな・・・こと・・・って」

俺も実際の敗北を目の当たりにして動揺せずにはいられなかった。

「これで貴方のキルトは敗北、自ずと自我は消えるでしょう。今の内に別れの言葉でもかけてあげなさい」

こんなの・・・間違ってる。なぜ大切なものが失われなければならない？そんな戦いの為に！

俺はいずれウィリーをあんな目にあわせてしまうのか？

考えられない、平然と戦っている自分が想像できない。

黒土がモモへと近づく。

「モモ、すまなかった俺が不甲斐ないばかりに・・・ルカを取り戻せなかった」
その中年でイカつい風貌のおっさんはどこかかすり声だった。
「いいのよ、ルカはもういないって知ってたから。だからイサオはもう無理しないで？」
初めて話すモモはかわいい女の子の声だ。だが力はもうない。
「・・・妻にまたルカを見せなければ・・・俺は・・・俺は・・・」
「確かにルカは必要・・だった、でももういないの。だか・・・ら今度はイサオが・・奥さんの近くにいてあげて？それだけで・・・もっと変わるはずだから！」
モモの声は力強く、しかし段々と薄れていっていた。
「そうか・・・そうだな、モモありがとう。おまえがルカのぬいぐるみで本当によかった」
黒土は涙して言った。
「泣かな・・いで、ルカと・・・私はいつも・・側にい・・る・・・か・・・ら」
モモは今にも消えそうな自我で伝える。
「ああ・・・がんばるよ」
「よか・・った・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

――――――――――――その後、モモは普通の縫いぐるみへと戻った。

そして間も無く黒土も倒れ伏す。これが昏睡状態だろう。

俺の傍らでウィリーは泣いていた、どういう心境なんだろうか・・？

俺は『その事』平然とやってのけた彼女に問いただす。

「なあ、こんな事になんの意味があるんだ？」

「意味などありません、皆自身の大切なものの為に戦うだけですから」

「でもニューって奴が首謀者なんだろ？あいつの目的は！」

「知るはずがありません、一構成委員ですから」

「俺はこんな戦い嫌だ、縫いぐるみを戦わせるのも！人を悲しませるのも！だから・・・」

俺は決意を混めより一層力強く言い放つ。

「俺がこの戦いを止める！」

律花がゆっくりと振り返る。

「そうは言っても、あなたには力がなさ過ぎる。無理なことですね」

だが俺は確信を込めて言う。
「そのためにあんたが来たんだろ？教えてくれマスターの力の使い方を！」

彼女に初めて笑みが溢れる。
「ふふ、実に可笑しい・・・・面白い人ですね？宙人は・・・・・」
「いいでしょう、決して甘くはしませんので覚悟しておいてください」

こうして幸高（こうたか）　宙人（ひろと）と機嶋（きじま）　律花（りつか）の修行兼共同生活が始まった・・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9066x/

最愛のキルト

2011年10月28日09時12分発行